ま・ち・か・どズームIN！

みなさんからのすてきな情報を待ってます！

白二小校庭に４頭の馬が出現
角田養護学校白石校で乗馬体験

６月９日、白石第二小学校内の角田養護学校白石校では、大和町の船形コロニーからやってきた馬４頭による乗馬体験学習を行いました。

この体験学習は、子どもたちの情緒の安定や身体機能の向上と、交流している第二小児童への感謝の気持ちを込めて実施されたもので、白石校の児童９名のほか、第二小の１年生や特殊学級児童も参加しました。

始めは恐る恐る乗馬していた子どもたちも、慣れるに従って「すごい、すごい」と歓声を上げていました。

植林を続けて緑の森を復元
蔵王山ろくで植林祭開催

「蔵王のブナと水を守る会」では、一昨年に市と共同で南蔵王山ろくの荒れ地13㌶を買い取り、７年計画で緑の森の復元活動を行っています

６月８日には、市内外の約230人が参加して、第２回目となる植林祭が開催されました。

晴天のもと、参加者は1.7㌶の土地にブナやミズナラなど12種類の樹木約2,700本を植林しました。

植林後は、仙台市野草園長の上野さんの講演を聞くなど、植物や森林の生態系などへの理解を深めていました。

どうだんの森開園

福岡深谷地区の水芭蕉の森に隣接した「どうだんの森」では、３年ぶりに淡紅色のサラサドウダンの花が見ごろを迎え、６月９日、この日を楽しみにしていた約100人が参加して、開園式が行われました。

滝上地区で子どもたちの田植え体験

学校週五日制を契機に、自ら学び考える力を育む機会にと、滝上小中学校親の会では、子どもたちの田んぼ作業体験を実施しています。５月25日には、小中学生や父母、地域の方々などの約40人が、約120㎡の田んぼでもち米の田植えをしました。

おはなしから伝わるやさしい心
深谷地区で「昔ばなしを聞く会」

６月６日、深谷保育園の園児と祖父母、深谷小学校の２年生約60人が、同地区の湯口寺で、「昔ばなしを聞く会」を開催して交流しました。

住職の高野さんから、昔の学校や寺の大イチョウの話を聞いたのに続き、福島県梁川町の「おはなしおばさん」横山幸子さんが、いたずら好きな妹の話やわがままな殿様の話など４話を披露しました。

子どもたちは、横山さんの身振り手振りを交えたお話に目を輝かせて聞き入り、やさしい心の大切さや善悪の判断などを感じ取りました。

みんなの手で市内を美しく
市内一斉クリーン作戦

５月18日の早朝、昨年秋から春と秋の２回実施することとなった「市内一斉クリーン作戦」が市内各所で行われました。

約6,600人が参加したこの作戦。集められたごみは46トンにもなりました。

市内各地では、自治会や企業単位などでさまざまな清掃活動が行われ、多くの地区や団体が、環境美化に対する貢献により、各種の表彰を受けられています。

▲出発式会場となった越河公民館周辺を清掃する越河地区の皆さん

益岡公園で子どもまつり開催

５月18日、益岡公園で恒例の「こどもまつり」が開催されました。

フリスビーやストローロケット、障害物ゲーム、輪投げなど、たくさんのコーナーが設けられ、参加した約500人の子どもたちは、夢中になって遊んでいました。

ホタルの飛び交う里づくり
薬師堂地区で「守る会」結成

福岡蔵本の薬師堂地区では、農業集落排水の供用開始に伴って、数年前から、堀や水路に昔のようにホタルが飛び交うようになりました。

このホタルを子孫に残していこうと、自治会や老人会をはじめ、集落排水事業組合や企業など、地区が一丸となって、「薬師堂ほたるの里を守る会」がこのほど設立されました。

５月25日、初の事業として約80人が参加して、付近の山林や道路わきの清掃を行い、テレビや古タイヤ、食べかすなど、心ない人たちが不法投棄したごみの山を片づけました。

さわやかな汗を流しました
市民グラウンドゴルフ大会開催

６月７日、白石川緑地公園で第12回市民グラウンドゴルフ大会が開催され、中学生から93歳までの市民79人が、さわやかな汗を流しました。

会場では、好プレーや珍プレーのたびに歓声が上がっていました。

■各種目の優勝者（敬称略）

●団体　深谷南区チーム

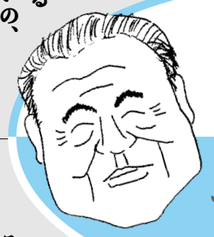
※同チームと準優勝の小原グラウンドゴルフ愛好会Ａチームは、８月の大河原管内大会への出場権を獲得。

●個人　オープンの部　川村　和子

シニアの部　平間　光雄

ジュニアの部　鈴木　雄貴

川井市長の せせらぎトーク



ペーパープラン

過日上京中、孫達と食事をした。小学校と幼稚園の女の子である。目を細くして「何を食べたいの」と聞くと、「天ぷら」。親バカどころではない、ジジバカを発揮して、天一の暖簾をくぐった。そんなにカッコつけたって相手は孫だもの、と言われるのを承知の上で無理をしている。

「おじさんに、好きな物揚げてもらいなさい。」と言ったところ、二人口を揃えて、「私、お芋。」続けてまた、「お芋。」揚げ方をしていたおじさんは笑って、「もっとおいしいものもあるんだよ。」と言うと、「いいの、お芋。」である。うちの婿殿はしつけがいい。安いのばっかり食うと思って、ニコニコ顔でいたら、なんとその後、〝お任せの一人前〟をペロリと食べたのには驚いた。その時揚げ方のおじさんから聞いた話である。

地震が来たら、すぐガスの火を消して、逃げろと言われているが、これは実際の経験ではなく、頭で考えた評論家の説だ。天ぷらを揚げている時に地震が来たら、危なくてガスのスイッチなどに触れられるはずがない。飛び散る熱い油を浴びて、大火傷をしてしまう。まず待避して安全を確認し、消火器で消す。なるほどなと思った。

それから何日かして、五月二十六日午後六時二十四分、三陸南地震が襲来した。震動が止むとすぐ市役所に電話したが、現在は被害報告は無いと言う。幹部職員に非常招集をかけるように指示し、生活環境課に飛び込んだが、皆必死に電話を抱え込んでいる。話し中で電話が繋がらない。これは想定外の出来事であった。白石市地域防災計画によれば、災害が起こった場合に、まず情報を収集、判断し、担当課長が市長に災害対策本部の設置を申告し、市長が本部長に就任する。電話が不通なのでは情報収集ができない。ページングシステムで、消防団に指令を流し、情報収集しようとしたが、システムの母機は市には無く、消防署にある。対策は後手後手とまわってしまう。

人海戦術しかないと判断し、その時刻に庁内に残っていた職員および駆け付けて来た職員五十数名を十班に分け、情報収集に出動させた。これは、既に各地の災害で電話が通じなかった例があるにもかかわらず、発想を変えることなく、通じるものと決め込んで計画を構築した、典型的なペーパープランである。三陸南地震で、二十六日の十八時三十分から二十時三十分までにメモをした反省点。

一　電話が繋がらないこと（殊に携帯は地震直後からパンクした）を前提とした計画でなければならない。

二　地域防災計画は、停電を想定していたか？自家発電の必要はないか。

三　仙南広域消防本部と構成市町との連絡が不可能になり、広域災害時支援協定（福島県北部から山形県南部まで）による支援依頼が出来ない。

四　大河原地方県事務所と通話不能。更に、県防災課と災害無線が繋がっていることを失念していた。これは、自衛隊の出動要請ができないことを意味する。

五　刈田病院は免震構造で、発電機能もあり、医療対策は充分であったが、無線が無く、消防本部緊急指令室や救急車との連絡が取れなかった。

以上、全て情報システムの問題である。市では、地域防災計画の再構築を急いでいる。